

東京駅丸の内駅舎保存・復原

CONSERVATION & RESTORATION

～いま、甦る赤レンガ駅舎～



概要

Outline

大正3年に開業した、日本の玄関口、東京駅。
鉄道網の増強、ならびに丸の内、大手町、八重洲、日本橋という
日本を代表するビジネス街とともに発展してきました。

そして今、東京駅は歴史と未来、日本と世界が対話する街、
Tokyo Station Cityに生まれ変わります。

八重洲側では、首都東京の新しい顔と未来への予感を感じさせる、
二つの超高層オフィスビルとそれらをつなぐ歩行者デッキ、
日本橋側では、コンファレンス施設やホテルをあわせもつ
オフィスビルが建設されます。



丸の内側では、国指定重要文化財である丸の内駅舎を創建当時の姿に復原します。
中央の大屋根と南北にドーム屋根を配した丸の内駅舎は首都東京を代表する都市のシンボリックな景観として、
さらに生きた文化財として大切に保存し、未来へと活用してゆきます。

■ 現状



■ 完成



基本方針

風格ある都市景観の形成

外観とドーム内観を復原します。

歴史的建造物の継承

現存する部分を可能な限り保存します。

赤レンガ駅舎の恒久的な保存・活用

駅、ホテル、ギャラリーとして活用を図ります。

明治22年に東京府知事より告示された東京市区改正設計において、新橋・上野両停車場を結ぶ市内貫通高架線の建設が定められ、東京市中心部に停車場を設置する旨の訓令が出されました。中央停車場の建設は、日露戦争の影響や設計変更などにより具体化まで時間を要しましたが、明治41年3月25日に着工、6年後の大正3年12月20日、丸の内駅舎は日本の近代化を担う首都東京の中央停車場から「東京駅」と名称を改め、営業が開始されました。関東大震災の被害も特になく、昭和20年5月の戦災で焼けるまでの31年間首都東京のシンボルとしてその雄姿をとどめていました。

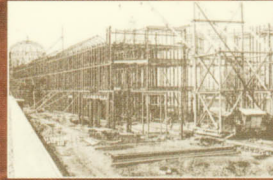


辰野金吾 (1854~1919)

設計は明治建築界の重鎮であった辰野金吾。ヨーロッパで西洋建築を学び、日本銀行本店を始めとして生涯200余りの建築物を設計し、近代日本をリードした一人です。

- 明治 5年 (1872) ■ 新橋～横浜に鉄道が開業する
- 明治 22年 (1882) ■ 「市区改正設計」告示により、中央停車場の建設が決まる
- 明治 36年 (1903) ■ F.バルツァーが設計案を提出する
- 明治 36年 (1903) ■ 辰野金吾に設計が依頼される
- 明治 41年 (1908) ■ 基礎工事に着手する
- 明治 43年 (1910) ■ 辰野金吾が最終案を鉄道院に提出する
- 大正 3年 (1914) ■ 「東京駅」と名称を改め、営業を開始する
- 大正 4年 (1915) ■ 東京ステーションホテルが開業する
- 大正 12年 (1923) ■ 関東大震災が起こる (駅舎はとくに被害無し)
- 大正 15年 (1926) ■ 行幸道路が完成する
- 昭和 8年 (1933) ■ 東京ステーションホテルが東京鉄道ホテルとなる
- 昭和 20年 (1945) ■ 空襲による火災により、屋根等が焼失する
- 昭和 20年 (1945) ■ 戦災復興工事に着手する
- 昭和 22年 (1947) ■ 3階建の駅舎が2階建の駅舎として完成する
- 昭和 23年 (1948) ■ 改札の乗車・降車専用が廃止される
- 昭和 26年 (1951) ■ 東京ステーションホテルが営業を再開する
- 昭和 27年 (1952) ■ 屋根の天然スレート葺替が行われる (第1回目)
- 昭和 39年 (1964) ■ 東海道新幹線が開業する
- 昭和 47年 (1972) ■ 総武地下駅が開業する
- 昭和 48年 (1973) ■ 屋根の天然スレート葺替が行われる (第2回目)
- 昭和 61年 (1986) ■ 丸の内駅舎のライトアップを開始する
- 昭和 62年 (1987) ■ 国鉄が分割民営化し、JR東日本が発足する
- 昭和 62年 (1987) ■ 「とうきょうエキコン」が始まる
- 昭和 63年 (1988) ■ 東京ステーションギャラリーが開業する
- 平成 2年 (1990) ■ 屋根の天然スレート葺替が行われる (第3回目)
- 平成 7年 (1995) ■ 中央線高架橋ホームの使用が開始される
- 平成 12年 (2000) ■ 特例容積率適用区域制度が創設される
- 平成 13年 (2001) ■ 東京駅周辺の再生整備に関する研究委員会が開催される
- 平成 14年 (2002) ■ 保存復原計画に関する専門委員会が発足する
- 平成 15年 (2003) ■ 国の重要文化財に指定される
- 平成 18年 (2006) ■ 東京駅ルネサンスが開催される
- 平成 19年 (2007) ■ 東京駅丸の内駅舎保存・復原工事着工

基礎工事



鉄骨建方 (北ドーム付近)

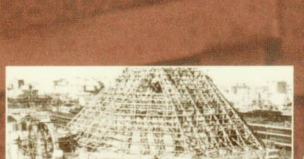
正面



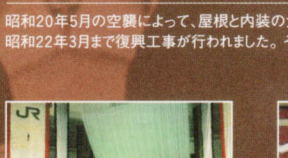
中央玄関



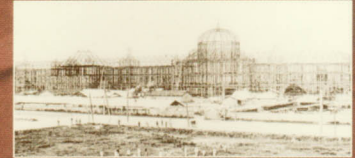
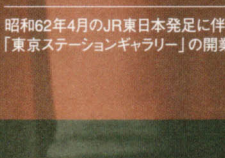
広場側被災状況



復興工事の様子



とうきょうエキコン



鉄骨建方

ドーム見上げ



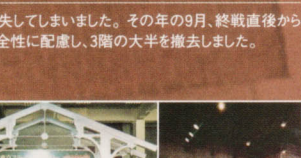
ドーム改札



南ウィング屋根被災状況



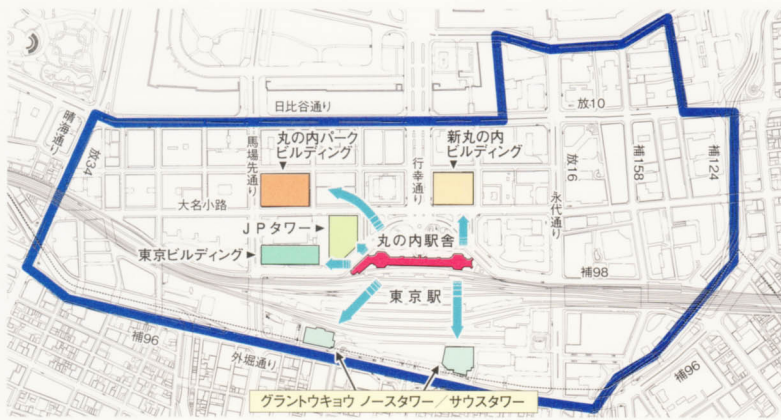
現状 (丸の内南口)



東京ステーションギャラリー

昭和62年4月のJR東日本発足に伴い、「とうきょうエキコン」の開催、「東京ステーションギャラリー」の開業など丸の内駅舎の新たな活用が行われるようになりました。

■ 特例容積率適用地区制度



平成12年に都市機能が集積する大都市の既成市街地のうち、特に土地の高度利用を図る必要性が高い区域に対して、容積の移転により高度利用を促進するために「特例容積率適用区域制度」として創設された制度。平成16年に当初の目的に加え市街地の防災機能の確保等のためにも活用できるように地区指定の範囲を拡大できる内容に改正され「特例容積率適用地区制度」となった。本計画は、特例容積率適用地区制度を活用し、丸の内駅舎の未利用容積を周辺建物に移転することで、東京駅周辺の開発を促進します。

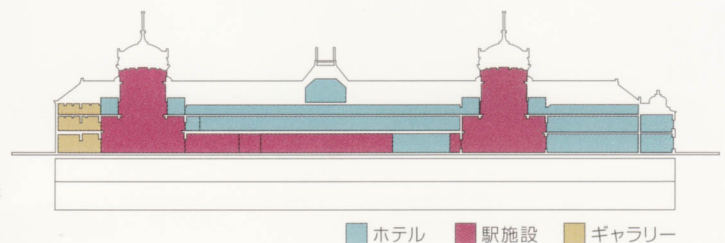
■ 諸元の変遷

項目	時期	創建時	現状（着工前）	保存・復原完了時
構造		鉄骨煉瓦造	鉄骨煉瓦造	鉄骨煉瓦造・RC造（一部S造・SRC造）
延床面積		約23,900m ²	約19,600m ²	約43,000m ²
主な用途		駅施設／ホテル／事務室（鉄道院）	駅施設／ホテル／ギャラリー	駅施設／ホテル／ギャラリー
階数		地上3階・地下1階	地上2階（一部3階）・地下1階	地上3階（一部4階）・地下2階
最高高さ		約45m（フィニアル含む）※	約33m	約45m（フィニアル含む）※
ドーム内観高さ		約28m	約28m	約28m
軒高		約17m	約13m	約17m
長さ／幅		約335m／約20m	同左	同左
煉瓦		<ul style="list-style-type: none"> ● 構造用煉瓦：約752万個（日本煉瓦製造（株）） ／227mm×109mm×60.5mm ● 化粧煉瓦：約85万個（品川白煉瓦（株）） ／109mm×60.5mm×15mmと45mm →厚さは2種類（下駄っ歯積） 	同左	化粧煉瓦：約40万個 ／109mm×60.5mm×15mm（SRC躯体に貼付け）
天然スレート		<ul style="list-style-type: none"> ● 宮城県雄勝産 ● 一文字葺 ● スレート板の寸法：363mm×181mm×6mm 	<ul style="list-style-type: none"> ● 宮城県登米産 ● ドーム部、中央部：魚鱗葺／切妻部：一文字葺 ● スレート板の寸法：303mm×181mm×6mm 	<ul style="list-style-type: none"> ● 新規：宮城県雄勝産・スペイン産 ● 既存再利用：宮城県登米産 ● 一文字葺 ● スレート板の寸法：303mm×181mm×6mm
主な材料等		<ul style="list-style-type: none"> ● 鉄骨：約3,100t（国産：約6割 八幡製鉄所／輸入：約4割 カネセ[®]-製（米）・フーテンガム・アイアン・アンド・スチール・カンパニー-製（英）） ● 松杭：約11,000本 ● 花崗岩：約1,700m³（岡山県北木島産と茨城県稲田産） 	<ul style="list-style-type: none"> ● ドーム天井（直径：約20m）：ジュラルミン・塗装仕上げ ● 線路側外壁：モルタル塗 	—

※ 建築基準法上の平均地盤面からの高さ。「東京停車場建築工事報告」によると最高高さは約46.1m（計測ポイントは不明）

■ 事業概要

事業名称	東京駅丸の内駅舎保存・復原工事
計画地	東京都千代田区丸の内一丁目9番1
事業者	東日本旅客鉄道株式会社
設計者	東日本旅客鉄道株式会社 東京工事事務所・東京電気システム開発工事事務所 株式会社ジェイアール 東日本建築設計事務所・ジェイアール東日本コンサルタンツ株式会社設計共同企業体
地域地区	商業地域、防火地域、特例容積率適用地区 ※重要文化財指定（H15.05.30）
敷地面積	約20,500m ² （特例敷地部分 約25,800m ² ）
開業予定	駅施設（一部） 2012年 6月 ホテル・ギャラリー 2012年10月



■ ホテル ■ 駅施設 ■ ギャラリー

※「現存する建造物について、後世の修理で改造された部分を原型に戻す」の意で当社は「復原」を用いております。
※本パンフレットの内容は計画段階のものであり、今後変更の可能性があることをご了承下さい。